

第13回縄文サミット

# 火焰型土器を2020年東京オリンピック・ パラリンピックの聖火台に



信濃川火焰街道

信濃川火焰街道連携協議会



アピール宣言

## 「火焰型土器を 2020 年東京オリンピック・ パラリンピックの聖火台に」

縄文土器を代表する火焰型土器は、日本文化の源流であり、浮世絵や歌舞伎とならぶ厳然たる存在である。火焰型土器を 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台の造形に昇華するという提案は、日本文化の意志を国際舞台に発言することにほかならない。

新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町で構成する信濃川火焰街道連携協議会は、2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に火焰型土器の造形を提案し、その実現にむけて活動することを宣言する。

平成 26 年 7 月 10 日

信濃川火焰街道連携協議会



趣意書

## 火焰型土器を 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に

小林達雄

縄文土器が、一万五千年前の日本列島に登場したのは、人類史上における奇跡ともいえるべき大事件であった。とにかく、土器発明までの足どりがもっとも良く解明されている西アジアよりもざっと三千年以上も先駆けているのである。

やがて縄文土器は、縄文文化の表看板として北は北海道北方四島、南は九州からはるか南西海上の沖縄諸島にまで行き渡った。そしてあたかも方言ことばに似て、各地域毎に独特な様式が生じた。しかし、それぞれの地方色を超えて共通する注目すべき性格がある。それが口縁部に立ち上がる突起である。

そもそも土器の本分は、容れ物としての機能であり、必要十分な容量が確保されるべき存在である。それ故、口縁を飾る突起は、土器の使い勝手に直接関わるものではないのだ。つまり人目を魅く大仰な突起といえども、実は文字通りの無用の長物以外のなにものでもない。むしろ役に立たないどころか、モノの出し入れの障害、邪魔にさえなるものである。しかも、汗水たらしてムラに運びこんだ粘土を相当量消費するばかりか、敢えて突起をつけるのに要する手間暇もばかにならない。だからこそ、古今東西のヤキモノに突起が一切見当たらないのも蓋し当然のなりゆきである。まさに縄文土器だけの特別な主張なのである。

この事実は、縄文土器の突起はカタチのデザインの問題ではなく、縄文人の世界観に関係するものであったことを示唆している。つまり、縄文土器は単なる容器にとどまるものではなく、縄文人が心に抱くことどもを体現しているのである。

その火焰型土器が所属する縄文文化は日本文化の源流であり、日本文化の歴史の中に組みこまれた厳然たる存在である。その意味では火焰型土器は、浮世絵や歌舞伎とともに、日本文化そのものなのである。

かくて、火焰型土器を 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に昇華すべきであるという提案は、日本文化の意志を国際舞台に発言することにほかならないのである。

